
ひゃくさいさん

伊佐山詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひやくさいさん

【Nコード】

N1407D

【作者名】

伊佐山詩織

【あらすじ】

詩と想い出だけが真実なのか……詩人だった父と過ごした村の日々、何かの符号のように蘇る言葉「ひやくさいさん」。時間を超え、空間を超え、詩と想い出が父と僕を繋いでくれる。

1 村の家へ

1

ずっと前、よく見た夢があつてね、飼つてた犬が妊娠して、まさに子供を出産してるんだ。小さい犬みたいな何かが次々と出て来るんだけど、それをパパの足が待ちかまえてて、踏みつぶす。プチッて感じ。音なんかしないし、血が出てるわけでもないんだけど、なんか、感じとしてね、プチッ。

母犬も別に悲しそうしてるわけじゃない。産み落とすたび、まだ産声もあげないうちに、子供たちがプチッて潰されてるつてのに。パパの顔はわからない。汚れた革靴だけが子犬みたいな何かの上にのせられて、ただ機械的に潰していくんだ。プチッ、プチッて。もちろん、本当のパパはこんなこと絶対に出来やしない。

現実に、僕が十の頃、飼い犬のノラが妊娠して出産したときも、貰い手を探さなきゃって、それこそ東奔西走して滑稽なくらいだったもの。それで生まれた六匹のうち四匹は引き取り手が決まって、それで、どうしても残ってしまいそうな脚の悪い二匹はママが勝手に保健所にやった。

「ああ、あのコら？ 保健所」
平然と言うママに、パパは何も口答えしなかった。

で、次の日、僕を連れて、ノラと一緒に実家に帰っちゃったつてわけ。

パパの実家は町から山三つ入った村にあつて、その当時、まだ大きな屋敷に住む人もなく残ってた。あの日、鎧戸を開けるなりワツと来たのは、屋敷に籠もった人気のない空気の臭い。土間って、普通は清涼な感じがするじゃない、それがね、今だったらカビ臭い、なんて言うんだろうけど、何とも言えない嫌な臭いが固まりになってワツときて、足が止まってしまったんだ。ノラは暗闇に向かつて

吠えたてるし、で、ああ、ここには『よくないモノ』がいるって、直感した。

パパは、

「これは『よくないモノ』がいるねえ」

「うん」

僕も確信を持って答えた。

僕らはそいつらを追い出すために広間の戸を一枚開けた。

反対側の戸を開けると、春の風が簾になって吹き抜けて行った。

広間の畳の上に巣くっていた『よくないモノ』たちはサツと影の部分に逃げ込んだ。

パパは縁側のホコリを新聞紙の大きさほど払って僕を呼んだ。

「ごらん」

庭先の柿の木だった。セロファンのように半透明な新緑から、木漏れ日と言うには少々強い逆光がチラチラと漏れていた。春そのものが結晶したような光だった。

「綺麗だろ」

パパはノラの頭をなでてやりながら言った。

「うん」

「ボクが小さい頃、この柿の木はね、この新緑を見るためだけにあったんだ」

「柿の実は、どうするの」

「小作の人たちが干し柿にしてた」

「パパは、それ、食べたの」

「食べないさ。好きじゃないから」

「ふうん」

「毎年、この木の、最後の柿の実一つだけ、カラスにとっておいんだ」

「カラスに？」

「うん。カラスはジクジクにまで熟したのが好きでね、渋い柿はもちろん食べない。可哀想だろ、柿がそこにあるのに食べられない

いなんて。だから、ね」

「ふうん」

そうやって、パパと二人、縁側に座り、どれほどの時間、僕らは柿の新緑に見入っていた。

「書けそう？」

僕は聞いた。

「才能が尽きちゃったのかなあ、でも、大丈夫」

「今日こそは書けそうな気がするんだよね」

僕のカラカイにもパパは笑顔を崩さず黙ったままうなづいた。その時、

「お坊ちゃんじゃなかつ？」

生け垣の向こうからお百姓が声をかけてきた。

「僕はもう、お坊ちゃんじゃないよお」

パパはふざけて山びこに叫ぶように言った。

「いやあ珍しか、お坊ちゃんばい」

お百姓さんはパパに構わず続け、門柱へと回り込んで庭先に入ってきた。そして麦藁帽を脱ぎ、首に巻いたタオルを手に取りながら、
「坊ちゃんが町に出ちから、風通しにたまに開くるくらいで屋敷は閉めたまんまですばってん、今日はどうしたんです？ 何か探しに帰ってきたんですか」

「いや、しばらくここに住もうかと思って」

「住む？」

「うん」

「お坊ちゃんが？」

「うん」

「町の奥さんはどげんしたつ？」

「とりあえず、この子と二人でね。あ、犬も一緒に」

「そのお子さんが総領ですか？」

「まあ」とパパはアイマイに笑った。

「こりゃあ、大きな大ごつばい」
お百姓は走って去った。

しばらくすると四方からポツポツとお百姓たちが集まり、パパに挨拶して屋敷に取りかかった。

掃除と言うより、解体に近かった。戸や襖やどころか、畳まで剥がされて生け垣や柿の木に立てかけられ、押入の中身さえ庭に広げられた。そこには山のような布団があり、見たことのないような数の座布団があり、膨大な数の箱膳があり、出てくるわ出てくるわ、まるで異国の王宮の虫干しだった。

でも、ここまでしても『よくないモノ』たちはきつとどこかに居場所を探して潜んでいるんだろう。

僕は箒も雑巾も持たせて貰えず、槇の木の下に置かれた椅子に座り、骨だけになっていく屋敷を眺めながら尻取り遊びを繰り返した。

「しりとり」

「りんご」

「ごりら」

「らっぱ」

「ぱらしゅーと」

「とり」

「りか」

「かり」

「もう、パパ、また『り』の攻撃してる。卑怯だ!」

「これもまた詩人の戦法の一つだよ、全然卑怯じゃない」

「ううん、大人のくせに卑怯だ、絶対に卑怯だ」

「詩人はね、大人じゃないんだ」

「でも、パパは大人だ」

とか、そういう言い合いをしてると、

「いつまでおらっしゃるとですか」

年輩のお百姓が聞いてきた。

「ずっと」

パパは短く答えた。

「ずっと、ですか？」

「うん」

「そりゃあよか」

お百姓は感極まったように言い、

「ほんなこつ、ありがてえ。今晚は酒もたっぷり用意しますきね。

あ、お坊ちゃん」

今度は僕に向かって言った。

「はい」

「好かん食べ物はないですか」

「ありません」

「ああ、そりゃあよか」

お百姓は笑いながら去った。

パパは、

「おい、タマネギと鶏の皮は」

そう、僕を見ずに言った。

「……大嫌い」

「ここでは正直にするんだ。村はね、みんながウソをつきながら、騙したり騙されたり、騙したり騙されたりしたことを、こんどは隠したり隠されたり、隠したふりをしたり隠されたふりしたり、そんなにしながら生きてる場所なんだ。ここでのボクたちの価値は、ただ、ただ、正直だつてこと、それだけなんだ。わかるかい？」

「うん」

うなづいたものの、僕にはその意味はサッパリわからなかった。

「じゃあ、言つて来なさい。本当はタマネギと鶏の皮が嫌いなんですって」

僕はお百姓を追いかけて、実はタマネギと鶏の皮が嫌いだと告げた。お百姓は大笑いし、さすがお坊ちゃんのお坊ちゃん、と僕の髪を

ホコリ臭い手でくしゃくしゃになるまでなげた。

その夜、襖の外された一階の広間には三十人近くのお百姓が集まり、大宴会になった。

僕の目の前の箱膳には巻き寿司と鯉の洗い、それに鶏のうま煮がドサツと盛られ、よく見れば鶏肉には皮はなく、タマネギも除けられていて、何か、子供心にも歓待の雰囲気を感じられた。

宴会がいつ始まったのか、いつ終わったのかもわからない。乾杯も挨拶もなく、喧噪だけがあり、杯と、返杯と、「懐かしさ」というお百姓たちと、「うんうん」と静かにうなづいてみせるパパと、やたらと僕に酒饅頭をすすめる女たちとがいて、裸電球が眩しくてその回りを飛ぶ蛾が何匹かいて、僕はいつの間にか寝入っていた。

気が付くとベッドだった。八畳の部屋で、豆球がついていた。縁側の廊下からはまだ宴会の声が聞こえていた。家の中にトイレがあるのかどうか解らず、僕は起き出して縁側に出た。知らない男の人と鉢合わせした。

「おお、坊ちゃんの坊ちゃん、どげんした？」

「トイレは？」

「トイレ？」

その男の人は頓狂な声を上げ、そのまま僕を宴会場へと引つ張っていった。

「坊ちゃん、お坊ちゃんが、トイレはどこ言いよるばい、トイレち」

宴会場に爆笑が、けれど何か暖かい爆笑が起こった。

「トイレちや」

他のお百姓がその爆笑を受けて言った。「トイレちや、町んもんばい、こん村にや、便所しかねえつ」

「んじや、アテがおトイレに連れち行こうね」

そう言って、女の人が僕の手を引き取った。僕は何か気恥ずかしく、そしてその照れた様子がまた暖かい爆笑のネタになったのだっ

た。パパもお百姓たちと一緒に楽しそうに笑っていた。

次の朝、散歩をねだるノラの声で目が覚めた。顔を洗って起きていくともうパパが散歩の用意をしているところだった。

「パパ、おはよう」

「眠れたかな」

「うん」

「散歩に行くか」

「うん」

「じゃあ、着替えておいで」

僕は八畳の部屋に駆け戻り、急いで着替えた。

パパと僕はノラを連れて霧の中に出ていった。

「ボクが小さい頃、ここで犬を飼っててね。でも、あの頃は放し飼いだっただから散歩に連れて行ったことはないんだ」

「つないでなくても、犬はどこにも行かなかったの？」

「行ったと思うよ。でも、呼べばちゃんと帰ってきた」

「ふうん」

「いや、最後は帰ってこなかった」

「居なくなっただの？」

「裏の山でね、死んだ。死ぬ姿は飼い主には見せないんだって言われてたけど、本当だったね」

そういう話をしながら、川を渡り、パパの通った小学校まで歩いた。木造で古そうだけど結構りっぱな学校だった。校庭には大きな桜の木が何本もあって、新しい緑をまとうて霧の中に浮かんでいた。

「パパ、僕、学校はどうするの？」

「行きたいかい？」

返事出来なかった。僕は学校が大嫌いだった。町の学校ではいつも先生や友達となんだか上手くいかず、学校に行くのがものすごい苦痛になっていた。その年も新学期から間もないのに僕はなんだかんだと理由を付けて、何度もずる休みをしていたのだった。もし町

の学校をやめてこっちに来たとしても、この学校を好きになれるとも限らない。学校なんて、きつとどこも同じだろう。

「学校なんて」

パパは言った。

「しばらく休んでいいよ。一、二年くらい、なんてことない。雄ちゃんは頭いいから、大丈夫だよ」

なんと返事していいかわからなかった。学校を休めるのは嬉しいけど一、二年となると想像もつかなかった。

「まあいいよ。義務教育だからね、向こうから何か言ってくるさ。それまでは村で遊んでたらしい」

パパはノラの綱を外した。ノラは何が起こったのか解らないらしく、パパの足下を嗅いでみたり、僕にじゃれついてみたりして、そして自分を束縛する綱がもうないことに気づくと、これまで見たことのないような速さで駆けだした。

「すごい！」

「多分、生まれて初めての全力疾走なんだろうね」

ノラは校庭を横切り、僕らと反対側の角にまで行ってこちらを振り返った。ノラの顔には何か不安げな表情が浮かんでいた。

「帰ってくるかな、ノラ」

僕はノラの不安が伝染して言った。

「来るさ。ノラ！」

ノラは全速力で駆けてきてパパにそのまま体当たりした。パパは校庭に倒れ、その顔をノラは嬉しそうに舐めていた。

「ようし、ノラ、ようし」

パパは寝ころんでノラと抱き合い、そのまま土の上を転がった。

ノラはパパの片腕をいったんすり抜けると全速力で校庭を駆け抜け、そのまま走って戻ってきてまたパパに体当たりした。今度もパパはふざけて校庭に倒れ、そしてノラの首輪に綱をつけた。

パパは立ち上がり、左手で服の土を払いながら、

「まあ、今日はこの辺で帰ろうか」

僕に綱をくれた。

「服、汚れたね」

「洗えばいいさ」

「洗濯機、無いよ」

「洗濯板はある」

パパは洗濯物を洗濯板に擦りつける仕種をした。

家に戻ると、土間の台所に女の人が二人居た。

「おはよう」

パパは二人に声をかけた。

「お坊ちゃん、その服は？」

一人が詰問するように聞いた。

「ああ、ノラとふざけてたら、汚れちゃった。あとで洗うよ」

「つまらんですっちゃ。そんなん得上に上がられちゃ、上が土だらけになるき。洗っちゃよくき、脱いぢ、そこに出しちよいちくれない」
「うん、ありがとう」

パパはその場で女の人に手伝って貰いながら上のシャツを脱ぎ、ズボンも脱いだ。そしてパンツ姿のまま台所の土間から上に上がり、仏間に用意された僕らの箱膳の前で胡座をかいた。

「お坊ちゃん！ そげな格好で！」

替えのズボンとシャツを持ってきたもう一人の女の人が叱りつけるように言った。

パパは嬉しそうな表情でズボンを受け取り、ゴロリと転がって座ったまま脚を通した。

「行儀ん悪かこつ。子供が真似しますばい」

パパの着替えを手伝ってやりながら女の人がこっちを見た。僕は首を横にブンブン振った。

「愛らしか子ね」

「でしょう」

パパは嬉しそうに言った。

女の人ふたりが僕らの朝食を運んできた。夕べの残りご飯で作った焼きオニギリと味噌汁、それに漬け物と卵焼きだった。朝にこんなご飯を食べるのは久しぶりだった。ママが朝作ってくれるのは、最近はいつもトーストと目玉焼きだったから。

「お昼は、そこにオニギリが入っちよりますき」

一人が竹籠を指さして言った。

「夜は、福ちゃんと節ちゃんが来ますきね」

「うん」

パパは相手の顔も見ずに、漬け物をかじりながら言った。僕も漬け物をかじった。

「おいしいね」

パパは僕を見て言った。

「うん」

ぼくは本当はよくわからなかった。

（続く）

2 歓待の夜と朝

2

パパは詩人だった。でも、詩人という職業があるのかどうか、十の僕にはよくわからなかった。わかっていたのは、ただ、この世には「詩人」と呼ばれる種類の人間がいて、その中の一人がパパらしいということ。

「いい？ パパは詩人なのよ！」

そう言って、ママはよく僕を叱った。

たとえば、僕が、

「今日は学校行きたくない」

パパは、

「行きたくないなら、行かなくてもいいよ。勉強なんて、イヤイヤやったって意味ないからね。今日はお家で本を読もう」

ママはパパのいないところで、

「パパの言うこと聞いちゃ駄目！ パパは詩人なんだから」

ある時、家に来たお客さんが僕に言った。

「お父さんの詩を読んだことあるかい」

「ありません」

「だろうね。こいつ、隠してるんだ」

パパはニコニコしながら聞いていた。

「でもね、雑誌に載ったぶんは図書館に行けばあるよ。一度、図書館に行って調べてご覧よ」

僕はパパの顔を見た。やっぱりニコニコと笑っていた。

「おい、西山、どうだい、自分の息子が自分の詩を読むって気分は」

「なかなかだね」

「なかなか、か？」

「うん」

「いいなあ、詩人ってやつは」

お客さんはパパの注いだお酒をグツと飲み、

「お父さんのこと、好きかい？」

僕はテレながらうなづいた。

「俺も好きだよ。こういう生き方が出来るなんて、詩人はいいよ。

羨ましい」

「お前もしたらいいんだよ、こういう生き方」

「俺には無理さ。家庭があるもの」

「ボクにも妻がいて、この子がいるよ」

お客は噴き出して笑った。

「そうか、お前にも家庭があるか。気が付かなかった。すまん、すまん」

「無いのはね、家庭じゃなくて」

パパは右腕を上上げる仕種をした。二の腕から先のシャツがダラリと垂れ下がった。

「スマン」

お客さんは深刻な顔で謝り、パパはやっぱりニコニコしていた。

僕らの朝食が終わると、二人の女の人は急須を持ってきて僕らの茶碗に注ぎ、自分らも湯飲みでお茶をすすりながら最近の村の様子をずっと喋った。

パパは嬉しそうに聞きながら、要所要所で「で？ で？」と合いの手を入れた。

「もうここまで来たら、どげんもこげんもなかですたい」

「そうだねえ」

「お坊ちゃんはどう思われるとですか」

「ダムのこと？」

「はアい、もちろんダムのこつです」

「必要だろうね。町にとつてはね」

「村にとつちゃ、どげんですか？」

「村も受け入れ決議出してるし、工事もここまで進んじやうとねえ」

「でも、沈むんはウチん部落だけですバイ」

「そうだねえ」

「お坊ちゃんが守った『ひやくしゃいしゃん』も……」

それを聞いてパパの顔色が少し変わった。

「別に、ボクが守ったワケじゃないよ」

「いいや、部落のモンは、みんな、お坊ちゃんが守ったと思うちよります」

「思いこみだよ」

「思いこみでん、何でん、良かつです。お坊ちゃんが命をかけてお守りになったち思うちよるき、こうやって部落んモンみんなで、お坊ちゃんの世話をしよるつでしようが。これは、別に、お坊ちゃんが、昔で言や総領様ちいうだけんこつちや無かですバイ」

「ごめんよ。ありがとう」

「どげんなるつちやろう、部落は」

「それは」

パパの口調は、これまで聞いたことがないくらい重かった。

「立ち退きだろうね。ダムは、国家が、国策としてやろうとしてる。工事もあれだけ進んじや、今さら何を言っても無駄だよ」

「部落は無くなるつですか」

「そうなるだろうね」

「バラバラに立ち退きちゆうことになりますか」

「うん」

「全部、バラバラですかね」

「多分ね」

「ああ、なーんか、淋しかですな」

「うん」

パパは茶をすすり、

「美味しいなあ。その山の番茶に、裏の井戸の水、だよな」

「そこら辺のモンばっかしでスミマセンね」

「いや、最高の贅沢だよ、な？」

パパは僕を見て言った。

「うん」

本当はよくわからなかった。

僕の部屋にしてくれた八畳に戻ると、窓の向こうから学校へ行く子供たちの声が聞こえてきた。月曜だった。

パパはママになんて言っ出てきたんだろう、と思った。

僕には、

『村に帰るけど、一緒に来るかい？』

だから、うん、と答えた。

『じゃあ、着替えとか持って、行こう』

『どのくらいの着替え？』

『さあ、一週間分、くらいかな』

で、ここにいるのだった。

学校は休んでいていいのだろう、と思う。あんなところ、僕の行く場所じゃない。でもそれはパパの言うことだ。パパは詩人なんだし、詩人の言うことはまともに聞いちゃいけない。これは、これまでママから散々聞かされてきたことだった。

で、どうしたらいい？

ママはいないんだし、パパは学校に行かなくていいと言ってるし、とりあえずここにいるほかないのだろう。そう思って部屋を眺めると、本棚にはものすごい本だった。

「入っていいかい」

パパの声だった。

「うん」

パパは入ってきてベッドに腰掛けた。

「ここ、パパの部屋だったの？」

「うん。子供部屋なんか、村の家にはなかったんだけど、ボクだけは特別にね」

「この本、みんな読んだの？」

「だいたいね」

「すごいね、パパ」

「ぜんぜん。だって、何年ここにいたと思う？ 中学、高校、大学

の十年くらい以外、何十年もここにいたんだよ。本を読む以外することもないしね。いつの間にかこんなにたまってしまったんだ」

「ねえ、パパ」

「なに？」

「いつまでここにいろの？」

「飽きるまでいようか」

「僕が？」

「ううん」

「パパが？」

「ううん。村のみんなが、さ」

僕は意味がわからなくて黙り込んだ。

「そういうわけにもいかないだろうな。まあ、そのうち、だれか迎えに来るよ。それまで遊んでよう。そう言えば、雄ちゃん、釣りつてしたことないよね」

「うん、ない」

「じゃあ、これから釣りに行こう。この季節は、きっとヤマメが釣れるよ。その押入れの上の段に、釣り竿があったと思うんだ」

椅子に上がって押入を開けると、ノートやよくわからない道具に混じって釣り竿があった。それを僕から受け取ると、

「これこれ」

パパは嬉しそうに眺めた。

僕は釣り竿とオニギリの入った竹籠を持ってそのままパパの同級生のケンちゃんの家に行った。学校とは反対側の、坂を少し登ったところだった。

「おおう」

庭で鶏にエサをやっていたケンちゃんはパパの姿を見て嬉しそうに手を挙げ、道まで走ってきた。

「エノハを釣ろうと思うんだけど、仕掛け、持っていないかな」

「ああ、あるよ。で、坊ちゃんは釣りしたこつあるっ？」

「ないんだ。だから教えてあげようと思って」

「教えるち言つたっちゃ…… 啓ちゃん、あんた、糸結べるか？」

「あ」

パパは、失敗したとでもいうように左手を挙げた。

「そうか、釣りをしたところは、まだボクにも右手があつたんだ」

「いいよ、坊ちゃんには俺が教えちやるき。坂ノ下の淵じやろが、一緒に行こう」

「悪いね」

「よかよか」

言いながらケンちゃんは庭に駆け戻って農具の立てかけられた納屋に入り、竹籠を持って大股で戻ってきた。そして、

「おい、啓ちゃんと釣りに行っち来るきね」

庭でケンちゃんと一緒に鶏にエサをやっていた奥さんに向かって叫んだ。奥さんは、ちよつと、と手でケンちゃんを制して家の中に駆け入り、水筒を持ってきた。そしてそれをケンちゃんに渡しながら、奥さんはパパと僕に満面の笑みでお辞儀をした。

『坂ノ下』と書かれたバス停の裏から細い道を下り、僕らは新緑の谷の底に降りていった。

降りながら、ケンちゃんは、

「坊ちゃんは、雄一君は、学校の成績はどげんね」

普通、と言おうとして、パパが昨日言っていたことを思い出した。正直だけが僕らの価値なんだって。

「良い方です」

「そりゃそうじゃろう。啓ちゃんは抜群じゃったもん。こん村から帝大に行くちゃ、なみんこつちゃねえ」

「行っただけだよ。出てないもの」

「そりゃ、啓ちゃんのせいじゃねえ。あれがなきゃ、啓ちゃんは博士様になっちよろう」

「やめようよ、その話は」

「啓ちゃんは、英雄やったつきね」

ケンちゃんは構わずに続けた。

「啓ちゃんがあそこまでして『ひやくしゃいしゅん』を守るちゃ、俺も思わんかったつよ。ほんのちよつと前までは迷信打破とか言いよつたくせにね。でも、あん時の啓ちゃんはすごかった。サーベルにもひるまんかったきね。鬼気迫るちゃ、あんこつばい」

「ははは、もうやめようよ」

「結局、二年も繋がれちよつたつよね」

「そのうちの一年は病院だったから。太って帰ってきた位だし」

「それでん英雄じゃったもん」

「ははは、もう本当にやめようよ」

パパはいつものように、機嫌良さそうに話を聞き流していた。
もう川原についた。

ケンちゃんは川底の石をひっくり返しては裏にくつついている虫を捕まえ、濡らした手ぬぐいの上に並べ、

「これが、エサになるつよ」

それから、糸の結び方、目印の付け方、竿の振り方、その他その他、釣りの全部を丁寧に教えてくれた。最初はケンちゃんが竿を振り、僕が当たりを待った。そのうち僕も竿を振れるようになり、淵の結構まん中の方まで、一人で仕掛けを投げ込むことが出来るようになった。

けれど何も釣れなかった。

「オカシかねえ」

ケンちゃんは申し訳なさそうに言った。

パパは軽い笑みを浮かべながら、

「淵の、真ん中じゃなくてね、岸の方の、ほら、その木の陰に投げ込んでみてよ。それで、目印のギリギリまでエサを沈めて、軽く上下してごらん」

言われたことを二、三度繰り返すうち、カッンとした軽い手応えがあった。竿を上げようとすると、それはビクビクとした激しい手応えに変わった。

「来たね」

パパは言った。

「慌てなくていいから、ゆっくりと竿をたてて……そう……そのまま、魚の頭を水面に出して……そう、そうやって空気を吸わせて……」

僕は糸をつかみ、足下に寄ってきた魚を岸に引き上げた。魚は十四、五センチの、ナイフのようにギラリとした銀色の固まりだった。

「エノハ」

ケンちゃんは言った。

「標準和名はヤマメ」

パパは付け加えた。

坂ノ下の淵から上流に向って歩きながら、お昼になるころには僕はもう四匹のヤマメを釣り上げていた。全部、パパの言う通りにして釣れたものだった。

「最初から四匹なんちゃ、大したモン」

ケンちゃんは言った。

「筋は良いね」

パパは言った。

「お腹すいた」

少し照れて僕は言った。

お昼にしようということになった。パパは川原に腰を下ろしておひつを開けた。

「松ちゃんのオニギリか？」

ケンちゃんは僕らの持ってきたオニギリをほおばりながら言った。
それがケンちゃんの四つ目だった。

「うん」

「あれん握ったつは塩けが丁度いいきね、なんぼでん食えっしまう」
「ドンドン食べてよ。持って帰ってもしょうがないから」

「啓ちゃんらはもういいつか？」

「ボクはもういい。雄ちゃんは？」

「もういい」

「二人とも、食の細せえこつ」

「町の間人なんて、みんな、こんなもんだよ」

「なら、残りは俺がもうバイ」

ケンちゃんは結局六つのオニギリを食べてしまった。

手を洗い、水筒のお茶を飲み、僕らはまた川を上り始めた。僕はだんだんと釣りが面白くなり、パパに言われる前に魚のいそうな所を探して仕掛けを打ち込んだりした。

「今の、なかなかいいね」

パパは言って、ケンちゃんと言一言、昔のことを話したりした。上流からの風が冷たくなってきたころ、水に沈めた竹籠の中には七匹のヤマメと十数匹の雑魚が泳いでいた。

「そろそろ上がるつか」

パパは言った。

「うん」

「今晚、屋敷には誰が行くつ？」

「福ちゃんと節ちゃん」

「あれ達やまだ用意やらしちやらんやろ。今晚は俺ん所に来い。こ
ん魚を料理するき」

「そうしようかな」

パパは僕を見た。

「このまま来りゃいい。ちょっと呑みよる間に魚くらい出来る」
「じゃあ、行こうか」

僕はうなづいた。

僕はケンちゃん宅でもみんなに歓待を受けた。ヤマメの塩焼きは二匹も食べたし、刺身のようなセゴシという料理も食べた。雑魚の煮物も美味しかった。

僕が十だったあの春の日、村のすべてが歓待に満ちていて、今思うと、まるで夢のようにウソ臭かった。

(つづく)

3 パパの死と「ひやくさいさん」

3

パパは僕が十七歳の年に死んだ。と言っても、早死にしたわけではない。僕はパパが四七の時の子だったから、享年六五、そう早くもない最期だった。

ママはひと月前に六二で死んだ。

そして弁護士のとってきた戸籍を見て、ずっと心にわだかまっていた謎が解けた。

ものすごい早産。のワケはない。

材木会社の社長の娘が結婚できない事情のある誰かの子を身籠もってしまう。その一方で右腕のない山林地主の総領息子が結婚も出来ずにいる。双方、すべてわかった上で見合いをする。二ヶ月ほどで子供が生まれる。事情はわかっていくせに皆黙って祝う。それだけのことだ。

「やっぱり、あのパパは本当の父親じゃなかった」

口に出せば気の鬱ぎも軽くなるかと思い、僕は戸籍謄本を閉じながら妻に言った。

「やっぱり？」

「うん。何となく気づいてたんだ。子供でも、雰囲気ってわかるんだよ。今思えばね、パパや、親戚とか、そういう人たちの優しさって、どこか違ってた。ウソ臭かった」

妻は謄本を覗き込み、それをパサリとテーブルの上に置きながら、「そうなの？ 気のせいじゃないの？ 出来ちゃった婚ってあるでしょう」

「それはない、あの父親と母親に限って、それはないよ」

「でもみんな、すごく優しくったんでしょ」

僕は考え込んでしまう。

僕は妻に、パパのあの夢の話をした。プチッ。潰されていたのは

僕だったのだ。

「夢の意味よりもね、なんでそんな夢をよく見たことを今でも憶えているのか、そっちの方が気になるんだ。気づいていたんだよ、心の奥底ではね」

「気にしすぎよ。いくら優しい人だったからって、自分の子でもない子供に、そんなに優しくできるかしら」

僕はまた考え込む。

「考えてみたら、俺はパパのこと何にも知らないんだ。なんで右腕が無かったのか、結局誰にも聞けなかった」

「片腕で働いてたの？」

「いや。前にも言ったと思うけど、詩人だったんだ。ママの会社の名目上の専務でね。多分、実際上の仕事は何にもしてなかったと思う。詩人とかいいながら、何も書いてなかったしね。今日は詩を書くって、いつも、毎日、そう言ってたような気がする。で、俺が『書けそう？』ってふざけて聞くと、嬉しそうに『うん』って笑ってた。俺は親父が声を荒げたりとか、そういうのを一度も見たことないし、それに、ペンを持って何かを書いているのも見たことない。考えたら変な親父だった」

「本当の詩人だったのよ」

「本当の詩人？」

「生き方が詩なのよ」

「なんだ、そりゃ」

「誰の言葉だったか忘れたけど、人間には四種類しかいないんだって。詩と無関係な人間、詩を読む人間、詩を書く人間、詩を生きる人間。お義父さんはね、きっと詩を生きる人だったのよ。生き方そのものが詩だったのよ。ステキじゃない。あ、そうだ。今度の週末、子供たち連れてダムに行こうよ。見せてないでしょ、お祖父ちゃんの山。それに、真実がどうだって、相続って、関係ないんでしょ」
現金な妻はもう獲らぬ狸を心配している。

「そりゃそうさ。父親の方が早く逝ってるんだから、この場合、本

当の父親が誰かなんて関係ないもの。相続なんて戸籍の上だけの問題だから。それに、幸い、と言っているのか、きょうだいもないしね。それにしても……」

「何？」

「この歳になるまで、意識できなかったなんて」

「もう、まだ言ってる。ね、今度の週末、ダムに行つて、あそこのレストランでお昼、食べようよ。子供たちと、ね。私の子供たちは間違いなくパパの子供なんだから」

そう言っていたのに当日は雨、けれど山の蔵を管理してくれている芳ちゃんにはもう連絡をとっていたので仕方なく、一人で行かけて行くことにした。と言うより、本当は一人で行きたかったのだった。妻や子供たちのいないところで芳ちゃんに聞きたいこともあったし、蔵でゆつくり探してみたいものもあった。僕は一人、村へのバスに乗った。

バスの終点で、降りる僕に下から傘を差しだしてくれながら、芳ちゃんは母へのくやみを言った。

「でも母は、皆さんには口うるさい人だったんでしょう？」

「細かこつによう氣のつく人でした」

ものは言いようだな、と思った。

僕は芳ちゃんの車に乗り込んだ。

「雨になつたね」

「昼までには止むごつ言いよつたですけどね」

「もう十一時なのね。すぐ止めばいいね」

「まあ別に、今日は外でする仕事も無かですき」

「うん」

僕はいつ父の話を切り出したらいいのかわからず、雨に煙るダム湖畔の景色を黙って眺めていた。

僕が十だったあの春、釣りに行った次の日は雨だった。

朝、ケンちゃんが一升瓶とワラビやツクシの佃煮を持って屋敷にやって来た。

「苗代の準備、いいの？」

欠伸をしながらパパは言った。

「雨なきね、急ぎでもねえき、今日は休み」

「じゃあ、まあ、上がってよ」

パパは朝食を終えたばかりの箱膳にケンちゃんを招いた。その日来ていた女の人二人は慌てて食器だけを片付け、ほかの皿や箸を用意した。

「なーんもねえ部屋は広か」

部屋を見回してそう言いながら、ケンちゃんは湯飲みに酒をゴツゴツプと注いだ。

「はい」

差し出された湯飲みをパパが受け取ると、今度は自分の湯飲みにもゴツプゴツプと注いだ。

「ここもダムに沈むちなったら、どげんする？」

「どうしよう」

「そういうこつも、おいおい考えなつまらんこつなってきたつバイ」

「そうだねえ」

二人は乾杯もせず湯飲みを口に付けた。

「実は、今日相談に来たつは、『ひやくしゃいしゃん』をどげんしたらいいかち思つてね」

「『ひやくさいさん』も沈むんだよね」

「うん」

「遷座かなあ。そういうかたちにして、山の上にも移すしかないだろうね」

「ねえ、『ひやくさいさん』って何？」

僕はおそろおそろ聞いた。父が守ったというそれがどんなモノなのか、最初に聞いたときから興味があった。「百歳さん」なのだろ

うか、その名前には何か神秘的な響きもあった。

「村の神社だね」

「まあ、そげなもん」

あまりにアツサリとした答えでそれ以上つつこめなかった。

パパとケンちゃんは静かに酒を飲みかわしていた。僕は八畳に戻った。

次の朝、パパは『ひやくさいさん』に連れて行ってくれた。

道ばたの木につながれたノラの淋しそうな視線を背中にしながら、僕らは雨後の濃い霧に濡れる杉木立の細い道を登って行った。すぐに古い鳥居が見え、その裏には少し空が開けた広場があり、奥には山を背後にしてさびれた社があった。そして道のそばの林の中には結構大きな小屋が朽ちかけてあり、その小屋の丸太をなぜながら、パパは、

「昔はこの小屋に巫女がいてね、死んだ人を呼びだしてたんだ」

「死んだ人が出てきたの？」

「もちろん。でも、生きた人まで、呼べば出てきたんだ」

それがパパの冗談なのかどうかもわからず、僕はただパパのするようにその朽ちた小屋に向かって手を合わせ、目を閉じた。

「じゃ」

パパは軽く言っ、もうそこを離れ、道を下り始めた。『ひやくさいさん』そのものにはけっきょく参らず、僕もパパの後を追った。『百歳さん』という神社なんだろう、長生きの神様なんだろう、などと漠然と思っていた。

「『ひやくさいさん』はどうなったんだろう」

ダム湖畔を走る車の中で僕は芳ちゃんにそれとなく聞いた。

「山の上に移しちよる。移してから行っただこと無かったですか？」

「うん」

「やっぱ、雄一さんでん、『ひやくさいさん』は気になりますか」

「なんか、親父が色々関わったらしいんだけど、何も知らないからね。芳ちゃんは何か知ってる？」

「私もね」とケンちゃんの孫は言った。「じいちゃんから聞いた話ですばってん。『ひやくさいさん』が焼かれそうになったこつがあったらしいとです。戦前の話ですばってんね。『ひやくさいさん』に住み着いちよった二セの巫女が、死んだ兵隊さんの魂を呼び出すとか言うち、それで問題になったらしいつですて。いや、本当のところは、当時のこつですき、巫女ちいや、その、アレでしょうが。風紀紊乱ち言うて、町で大問題になったらしいつですて。なんか、『ひやくさいさん』自体を焼くち言うて、町から警察か兵隊かが来たらしいつですよ。それで、夏休みで帝大から帰って来ちよった、啓治さん、お父さんが先頭に立って反対して、そんときの小競り合いで、サーベルかなんかで、右腕を斬りつけられたち、そげな話やっただすけどね」

想像していたのと、そう違う話だった。

「巫女は二セの巫女だったの？」

「あまり大きな声じゃ言えませんが、二セでしょう。そもそもが朝鮮人なき」

「朝鮮人の巫女？」

「そうですね。なき、終戦後はすぐに向こうに引き上げた言いよった」

「僕が昔『ひやくさいさん』を見たときは、まだ、巫女の小屋が残ってたなあ」

「ああ、憶えちよりますか。私らはなんか怖ろしかけん、あそこには近寄らんこつしとっただすけどね」

「怖ろしい？」

「なんか、ウチの祖父ちゃんの妹がタタられて、包丁を踏んで足に大怪我したこつがあるち聞かされたもんですきね」

「ふっん」

「まあ、迷信ですたい」

そう言う間にもう『ひやくさいさん』についた。小さな集落はダムが出来てまた一回り小さくなっていた。

車の窓から新しい鳥居の文字を見ると、いきなり背筋に寒気が走り、奇妙な気持ちがあふれ出した。

『百済社』

人は、自らも知らない膨大な記憶を、どこか闇の中に持っているのだという。

その闇が、ざわついた。

「『百済社』だったんだ」

「この部落のもんは、みんな百済の貴族の末裔ちいう言い伝えがあったらしいですもんね。みんな『西山』ち言いよるけど、元々ん姓元姓ちいいますかね、それは『金』ち言うらしいですばい。そげな文書があつたち、ジイちゃんか昔言いよつた」

「それで『ひやくさいさん』なんだ」

「まあ、ただの言い伝えですたい。誰もホントにやしちやらんつです」

「『百済社』だから朝鮮の巫女がいたのかな」

「さあ、そこまでは……降りて見ますか」

「いや、雨が止んでからでいい。とりあえず、蔵に行こう」

ダムへの水没の前にパパが他の集落の土地に建てた蔵には、僕が十の春のあの屋敷にいたのと同じような『よくないモノ』たちが満ちていた。ただ僕はもう十じゃないし、詩人でもないし、あれから世の中に揉まれるうち、その『よくないモノ』たちと共存することにも慣れていた。締め切った空気も町の空気よりはマシに思えた。

「捜し物でん、するとですか」

「うん。十二時に迎えに来てくれるかな」

「十二時、ですね」

芳ちゃん急ぎの用事でもあるかのように雨の中を走って車に戻った。

歓待の雰囲気は毛ほどもなかった。

一人になると、自分が何を探しに来たのかよくわからなくなった。膨大な量の本や、古い家財道具が並べられた蔵にいて、自分は何を調べようとしていたのだろう。

『ひやくさいさん』

そう呟きながら、『百済社』の文字を見たときに感じた闇のざわつきを取り戻そうとした。何かが引っかかっていた。

『ひやくさいさん』

もう一度呟いた。

そしてダムが決壊のように、突然、闇からドツと記憶があふれ出した。それは、なんでこんな大事なことを今まで忘れていたんだろうと訝しく思うほどに鮮明な記憶だった。あまりに鮮明すぎて、まるで自分が体験したことのようなだった。その記憶の中で、僕はパパだったし、パパは僕だった。

パパがまだ学生でパパの父親が生きていた頃、朝鮮人の母娘が村にやってきた。母娘は『ひやくさいさん』の社で雨露をしのぎ、時折、娘が現れては小銭で野菜や芋を村人から買って行った。

当時村長だったパパの父親が話を聞きに行くと、その母親は、
「私たちは百済の國、今の全羅道の貴族の末の『金』ともうします。聞けばこの集落の皆様もまた百済の貴族の末の『金』様たちでいらつしゃるとか。これもなにかの縁として、ここに置いておいていただければ幸甚に存じます。誓って、皆さまにご迷惑になるようなこととはいたしません」

「あなた方は、どうやってこの村で暮らしていくつもりかね」

「ちよつとした仕事を頂きながら。今日も、ちよつと今まで豆打ちの仕事を手伝わせていただいたところでございます」

「でも、失礼ながら、あなたは目が見えないのではありませんか」

「その替わり、この子がいます。この子は私の目と同じ。それに、私は、人の見えるものは見えませぬが、人の見えぬものが見えるの

です」

「それはいかに」

「例えばあなた様の、村長様の上のお子さま」

パパの父親は凍りついた。

「……それがどうした」

「お気の毒なことでした。でも、シナでは立派な最後までらっしやいましたよ。お上に頂いた銃は最期まで腕から離しませんでした。お子さまは、今靈魂になって戻られ、ほら、そこで……」

パパの父親は飛び上がりばかりに驚き、息を呑んだ。

「お父上をお見守りになつてらっしやいますよ」

パパの父親は真っ青になって家に帰り、二度と『ひやくさいさん』には近寄らなかった。ただ、魂ヨバイの出来る朝鮮人の噂はアツと言う間に村中に、町にまで広がった。

それから何年か経ち、『ひやくさいさん』の山に母娘の小屋が建てられ、パパは生意気な都会の学生になっていた。その頃のパパにとってこの世はこの世だけで全てであり、見えるものだけが全てであつて、あの世もなければ靈魂もない、すなわち本に書かれてあることだけが全て、だから、ないものがあると云いくるめ村人を騙し金を取るなど言語道断だった。

「あなたはと思うのだ」

パパは朝鮮人の娘に聞いた。パパにはこの娘が魂ヨバイのようなインチキを好きでやっているとは思えなかった。かつて交わした言葉に巫女の娘らしからぬ合理的な知性を感じ、本を貸し、返して貰うときのその感想の的確さにまた驚き、それ以来、帰省の度に本を通じて心を通わせていた。きっとこの二人はお互いに恋情さえ抱いていたのだろう。いや、きっとそうに違いない。

「……お坊ちゃんの言う通りです。母は二セモノです。あちこちで私が聞き込んだ話から、亡くなった人のお話を作るのです。みんな、すっかり信じていますが、私にはわかりません。あれはインチキです」「あなたはそれが良いと思うのか」

「決して思いません。良くないと思います。人を騙すのは決して良
くはありません。悪いことです。それに……」

「酒、かね？」

「そうです。働かずにお金が入ってくるもので、母は今は酒に溺
れてしまっています。今のこのインチキ巫女もそう長くは続かない
のではないかと思われます」

「どうしたら良いと思うかね」

「母のためにもインチキはやめさせた方が良いでしょう」

「本当にそう思うかね」

「はい」

「だったら私に良い考えがある」

（つづく）

4 朝鮮の巫女

4

僕が十だった春、パパと一緒に村に来てもう一週間くらいは過ぎていただろう、あの日、巫女に会った。

その頃、僕はもう一人で釣りに行けるようになっていて、あの時は釣り場を自分一人で新規開拓しようと思い、坂ノ下のずっと下から川原へ降りようとしていたのだった。

パパが言うには、釣りは「一場所。二エサ。三に腕。それよりなにより、まずは運」なんだそうで、だとしたら、場所とエサを教えてもらってさえいれば腕がどんなだろうと運があれば釣れて当たり前なんで、そう言われてはかなり悔しかった。どうしても、自分の見つけた場所で、自分の採ったエサで、ヤマメを釣ってみたかった。ところが坂ノ下からバス道をいくら歩き下っても谷に降りていく道は見つからなかった。降りられるか、と思つてすこし下りてみてもすぐに田んぼに突き当たってその下は石垣だったり、別の場所では突き当たりが湧水を集めた水くみ場だったりで、どうしても川原へと行き着けない。

もう少しバス道を下って降り道を探るか、それともいつものように坂ノ下から降りるか、あるいはもっと上流を目指すか。少し立ち止まって考えていたところに、いきなり、そう、僕にはまさに「いきなり」に思えたのだったけれど、いきなり、巫女が現れたのだった。

なぜこの女性が巫女だとわかったのか。よくわからない。ただ、本当にいきなり、目の前に現れた女性が、

「西山啓治さまの、お坊ちやまでせう」

はじめ、何を言われているのかわからなかった。

わからなかったけど、それが戦前の小説の言葉遣いだということには理解できた。僕は村に来てから何もすることがなく、仕方なく八

畳の部屋で戦前の本ばかり読んでいたから。

「お坊ちやまは町からいらしたのでせう」

「ええ、仰るとほりです」

僕は戦前の小説の口まねで答えた。

「賢さうなお坊ちやまで居らつしやる」

「わたくしにそのやうな言葉はもつたいなう御座居ます」

巫女はそばに寄ってきて屈み、僕の手を取って愛おしそうに優しくなげた。

「啓治さまはお元気でせうか」

「はい、父はとても元気にしてをります」

「お父様のお仕事のはうはいかがでせう」

「毎日毎日、才能が払底し閉口だ、などとまうしてをります」

「マア、啓治さまの才能が払底だなどと」

「父はいつも、さうまうしてをります」

「お坊ちやまは、お父上の書かれたものをお読みでせうか」

「一遍とて読んだことは御座居ません」

「それは、お父上もたいへん残念なことだせう」

「……」

僕は何とも言えなかった。

黙り込む僕の手の甲に巫女は頬を寄せ、唇でやさしく触れた。

「お父様は、大変立派な方なので御座居ますよ。ほんたうの……ほんたうの詩人……」

瞬間、僕はパパになり、パパは僕になった。

「そもそも、あなた方はどうしてこの村に来たのだ」

「パパは（そして僕は）巫女の娘に優しく聞いた。

「母は全羅道の者と申しておりますが、あれも嘘なのでございます。本当は平安道の両班でございました」

「そのような身分のものが、なぜここまで」

「両班とは申せ、母は朝鮮でも巫女のようなことをしておりました。

このようなこと、聞かすもお坊ちやまのお耳を汚して恐縮でございますが、結構向こうの村では重宝がられておったものでございます。少々の風邪や腹痛、頭痛であれば、医者などよりも母の祈禱の方が効くなどと、村人達は申しておりました。今日はあの部落、明日は向こうの村、などと、結構忙しい毎日をおくっておったものでした」

「それがなぜ、このような内地の田舎にまで流れてきたのだ」

「おお、お坊ちやま、そう先をお急ぎなしますな。ものには順序というものがございます」

「それはすまなかった。もう急がせぬから、続けてくれ」

「恐縮でございます。母はもともと、生まれも両班のお姫様でありました。母の夫となられた方も、もちろん釣り合いのとれたお殿様。鴛鴦のようにお似合いの、素晴らしい夫婦となるはずでした。ところが、婚礼の夜、母の夫となられた方は、初夜の床も明けぬうち、突然、亡くなられたのです」

「なんと！」

「母は血の涙を流して哀しみ、そして盲いたのでした。それ以来、巫病を得るようになったので御座います」

「ならば……」

「ああ、どうか、その言葉は吞み込んで下さいまし。仰りたいことはわかります」

そして巫女の娘はうつむき、ややあつて、意を決したように顔を上げ、

「母に新しい男の人が出来たのです。内地のお役人様で、私たちの家にお仕事で泊まり込んでいらつしたのを、母もお世話をいたしておったのです。植林のための調査で朝鮮にやってきた、熊のように大きな、素朴な方でした。私には内地に戻るたびに立派なご本を買ってきてくれた上、文字の読み書きも教えてくださったのです」

「優しい人だったのだね」

「はい。母は、その方が家にいらつしやる間は、私のことは七星様の娘だと言つておりました。七星様から預かった姫なのだ

と。大事にしなければ家に厄災があるぞ、などと言っておりまして。ところが、そんなタワゴトが続くワケもありません。お役人が内地に帰られた後、母と私は家を追い出されたのでした。その後、山神閣やお寺で雨露をしのぐ日々が続く、ある日、近くのお子さんがいなくなるということが起こりました。皆は大騒ぎして探しましたが、なんの手がかりもありません。ところが母はその寄り合いの場所へふらりと出かけ、そこで巫病を得、当の子供の口となり、今いる場所を知らせたのでした。皆は半信半疑、母の言うその淵に出かけていき、そして、実際、そこに死体が上がったのです。そのようなことが何度か続き、母は村の巫女として認められたのでした」

「成程」

「そして相当のお金が貯まれば、もう居ても立ってもいられず……」

「内地の男の元へ、かね」

「その通りで御座います」

「……なんと愚かな……」

「おっしゃいますな。女とは愚かな生き物で御座います」

「いや、男もまた、女と同等、愚かな生き物なのだよ」

二人はふと目を見合わせ、その一瞬の心の通いに身の置き所のない気まずさを感じ、そしてその雰囲気をうち消すように、巫女の娘は続けた。

「……お坊ちゃまもご明察の通り、男には内地に妻も子供もありました。あれほど優しくかった態度も豹変、まるで乞食を見るような目で私たちを睨みつけ、つきまえば警察に訴え出ると脅したのでした。警察に捕まってはまた朝鮮に帰されてしまうと、私たちは逃げ、さらに逃げ、また逃げて、山奥に百済の末裔の村があると聞き、ここにたどり着いた次第に御座います」

「うむ」

「でも内地のあの男は、脅しながらも、母には気づかれぬよう、こっそりと私にお金を握らせてくれたのでした。男も辛かったのですよう」

「うむ、きつとそうだろう。男とは実に愚かな生き物なのだ」

「いいえ、女もまた、男と同等、愚か者で御座います。母は、男からお金を受け取ったことを知ると、私をあの杖でひどく打ち据えしました。おお、私は汚れた。私は穢れた。私はそんなハシタ金が欲しくて内地まで来たんじゃない、ひとこと、たった一言で良い、優しい言葉がかけて欲しかっただけなのだ。お前は何という穢れた娘だ、金を乞うなどと、なんて汚い娘なのだ。これまで七星様からのお預かりものとして、大事に、大事に、育ててきたのに、なんということ、人間の男から金を貰うなど、お前はその金で私を穢れたのだ、汚したのだ……私を打ち据えながら、光の失せた母の目からは、一筋の深紅の血の涙が、確かに流れ落ちていたので御座います」

僕が巫女に会ったあの春、気がつけば川原だった。時がどれほど過ぎたのかもわからず、ただ、巫女の、いや巫女の娘の頬と唇の感覚が手の甲に生々しく、血の涙の跡さえ感じられるようで気味も悪く、僕は釣りに行くのをやめて屋敷に走って帰った。逃げ帰ったと言ってもいい。そして八畳の部屋の本棚にある雑誌の背表紙にパパの名前を見つけ、それを取り出し、恐る恐る開くと、そこには無数の『よくないモノ』が巢くい、ボドボドと、次々と滝を成して床に落ちた。十だつた僕はギャツと叫ぶなりその雑誌を放り投げた。(つづく)

5 巫女の踊りと「よくないモノ」たち

5

放り投げたのだったけれど、その書かれてある中身はもう頭の中に入っていた。なぜならパパは僕だったし、僕はパパだったから。

「だったら私に良い考えがある」

パパが（そして僕が）そう言った日から十日ほど経った夕方、『ひやくさいさん』の杜に部落の若者、男女十数人が集まった。そして口々に、招んでもらいたい魂があると叫び、巫女に小屋から出てくるよう懇請した。

「何事です」

出てきたのは娘だった。灯に照らされてやや黄色みがかつてみえる朝鮮服をまとっていた。その表情は神のように硬く、その目で一度射られれば石化してもはや二度と動けないかと思われた。

「何事です」

娘は繰り返した。

「招んで貰いてえ人がおるとです」

先頭に立っていたケンちゃんが言った。声が震えていた。

「こいつと」

ケンちゃんは妹を押し出した。

「結婚するはずじゃった男です。去年肺病で亡くなったはずが、おとついでから、こいつの枕元に現れち、なーんも言わんで立つちよるとです」

「見たのは？」

「こいつだけです」

「本当ですか？」

娘はケンちゃんの妹に聞いた。

ケンちゃんの妹は黙って頷いた。娘の威厳ある声に怯えているようだった。

娘は巫女の小屋の中に消えた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

ケンちゃんの妹は怯えた声でケンちゃんに助けを求めた。ケンちゃんもまた怯えた視線を泳がせながら、若者らのいちばん後ろにいるパパの指示を無言で請うた。パパもまた黙ったまま頷いた。

娘が出てきた。

「招んでほしい者の名前をここに書きなさい」

ケンちゃんの妹は兄の目線を恐れた様子で、その紙に、

『西山啓治』

巫女の娘はそう書かれた紙を持って小屋に消えた。

「お兄ちゃん」

ケンちゃんの妹は極度の恐れに震えながら、ケンちゃんの顔を見上げた。ケンちゃんの顔は蒼白となり、そこには一滴の血も通っていないようにさえ思えた。

どれほどの時間が経ったのか、黄昏は夕闇になり、灯りを手にする者の辺りから外には漆のような闇が口を開けていた。魔境はすぐそこにあつた。十数人の若者は次第に寄り合い、輪になって、互いの息を貪るように感じていた。生き物の気配を感じていなければ、ぐにでもその魔界に引きずり込まれるような気がした。

……チャーン……

小屋の中で奇妙な力ネが打ち鳴らされ、静寂が破られた。

若者達は人間の輪を一瞬、締めた。

……チャーン・チャチャーン、チャーン・チャチャーン……

小屋の戸がいきなり開き、灯りと力ネを持った娘を従えつつ極彩色の巫女が歩み出てきた。そのまま若者達には目もくれず、まるで目が見えるかのような歩みで『ひやくさいさん』の社の方へ歩み、小屋と社のほぼ中間地点で立ち止まると、

「招んでほしいのは、お前力ア！」

杖の先をケンちゃんの妹の目の前に突きつけた。目が見えぬとは

思えぬ正確さだった。

ケンちゃんの妹は恐怖のあまり凍りついたのか、何も言えず、頷きも出来なかった。

「お前カア！」

ケンちゃんの妹はその場にヘナヘナと崩れ落ちた。

「お前カア！」

巫女の娘がケンちゃんの妹を後ろから抱き、抱き起こした。

「あなたなんでしょう？」

神そのもののような巫女の声に怯え切ったのか、ケンちゃんの妹は娘の声にさえ返事できなかった。

「そうです、こいつです」

ケンちゃんが代わって答えた。

「じゃあ、あなただけ、こちらへ」

……ギヤーツ、イヤダー……

人のものとも思えぬ声を出して妹は立ち上がり、その場を見当違いの方向へ歩み始めた。その歩みを抱きとめたのもケンちゃんではなく、パパでさえなく、巫女の娘だった。巫女の娘は優しい人間の声で、

「大丈夫ですよ。すぐに終わります」

もはや抵抗する気力もなくなったように見える妹を従え、巫女と娘は小屋に入っていた。そして小屋の戸に娘の手がかかったとき、パパは言った。

「私たちも、西山啓治に会いたい」

巫女の娘のしっかりとした目が帰ってきた。

「よろしいでしょう。みなさん、お入りなさい」

小屋の中は結構広くガランとしており、むしろ道場と言うにふさわしかった。戸の向かいの壁には北斗七星がかかり、龍の絵があり、山の神らしい女の絵があつて、床には、そこで舞を舞うらしい二畳ほどの舞台と、大きな菜切り包丁を刃を上にして二本平行に板に取り付けた、奇妙な道具が置かれてあった。

全ては四本の蠟燭だけで照らされていた。

「ヨバイタイモノノオ……」

舞台の上に立った巫女が裏返った声で叫ぶと、巫女の娘は舞台下のわきで丈鼓を叩きながら、また同じように裏返った声で、

「イエエエイー……」

「セエメエワア、イカニイ……」

「イエエエイー……」

「イカニイ……」

「ニシヤマケイジラゴハムニダア……」

もはや何語とも知れぬやりとりが巫女とその娘の間で交わされ、丈鼓に合わせた舞踊が始まった。朝鮮服の長い袖がゆったりと円を描き、襦袢の裾が風を起こせば、舞台の蠟燭の炎は前後左右に揺れ、娘の影も気ぜわしく揺れた。丈鼓の音のみが響く小屋の中、絶え間なく揺れる影と共にただ巫女の舞が続いた。

そのまま時だけが過ぎていくのではないかと思われた一瞬、巫女は二本の菜切り包丁の刃に飛び乗った。もちろん裸足だった。

若者達は皆、もちろんパパも、薄暗がりと言って良い小屋の中で息を呑んだ。

娘は丈鼓を叩きながら、

「ヌグセヨオ……」

巫女は、

「モダラヨオ……」

娘に答えながら巫女はいきなり菜切り包丁の上で跳ね、さらにまたもう一度刃の上に飛び乗った。

「ヌグセヨオ……」

「モダラヨオ……」

「ヌグセヨオ……」

「モダラヨオ……」

……

丈鼓の音に乗って際限なく繰り返される刃の上の跳躍に緊張の糸が切れ、ケンちゃんの妹は震えながら気を失ってしまった。

「ソンハミオットツケセヨォ……」

「ニシヤマア、ケイジイ」

ようやくその名を口にすると巫女は菜切り包丁から飛び降り、片膝を立てて舞台の上に座った。そして顔を伏せ、ゆっくりと頭を上げた。

揺れる影の中に娘の丈鼓の音が続き、巫女の盲いた目にはこの時確かな光が宿っていた。初めて見る巫女のその表情にパパもまた霊界の谷を覗き見たような恐怖を憶えた。

「西山啓治さまが降りられました」

そう、巫女の娘は丈鼓を打ちながら言った。

「西山啓治さまに聞きたいことがあったのでしよう」

けれどケンちゃんの妹は何も聞ける状態ではなかった。

「誕生日はいつでしょう」

パパは後ろから聞いた。

「年 月 日」

巫女はパパの誕生日を間違いないと答えた。

若者達の緊張が弛んだ。

「あなたは死んだのですね」

「……」

「あなたは去年、死んだのですね」

「死んだのではない、ここにいる」

「でも、一度、亡くなったのでしよう」

「……」

「ご命日は？」

「年 月 日」

パパが若者らに知らせてあった架空の命日だった。

「どちらで亡くなられたのですか」

「この村でえ、両親と弟たちに見守られえ……」

そのあまりの芝居に若者達の間から一瞬、失笑が漏れそうになった。この瞬間、巫女の化けの皮は剥がれた。

「死ぬときはお苦しみでしたか」

パパはその失笑を隠すように、質問を畳みかけた。

巫女はゆつくりと立ち上がり、西山啓治、つまりパパの断末魔を、それもパパが若者らに知らせてあつた通りに、寸分違わず、丈鼓に合わせて語り、演じ始めた。袖が風を切り、襦袢が舞い、優雅でもの悲しい所作だっただけに、それはもう、荘厳な衣装をまとった喜劇でしかなかった。丈鼓の音も、心なしか張りが失せていた。

「この子とのなれそめをお聞かせ下さい」

これもまた、皆には知らせてあるパパの創作を、巫女は実に立派に演じた。所々に混ぜてある下品なクスグリの箇所ではあからさまな失笑さえ起こったが、それも巫女は自分の語りと舞いで引き出した反応だと思いこんでいるのだろう、所作には次第に熱が入り、狭い舞台をはみ出さんばかりの舞踊になった。

「申し訳御座いませんが、もう一度、この子とのなれそめをお聞かせ下さい」

そうパパが言うと、驚いたことに、巫女はもう一度最初から、それも今度は最初から熱を入れて再現した。今度は若者達から手拍子さえ打たれ、所作は大ぶりになり、小屋は正に喜劇小屋と化した。

「もう一度、もう一度、今度はホントオーの所をおしえちくれない本当は、こん子とあんたはシタっちゃろう、腰が抜くるくらい、シタっちゃろう……」

パパではない誰かが聞いた。

ヒューと口笛が起きた。

巫女は所作の度に含んでいた酒がもう完全に回っていたのだろう、いきなり帽をとって髪を下ろし、けたたましく笑いながら激しく舞い始めた。その所作は下品きわまりないので、巫女の娘は丈鼓を打ちながら顔を伏せた。

男達は拍手と喝采で答えた。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
娘の打つ丈鼓の拍子が軽快なものに替わった。その拍子に乗りながら、巫女は極彩色の朝鮮服を一枚脱いだ。

男達は野獣そのもののような雄叫びをあげ、舞台のすぐそばにまでにじり寄った。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
巫女が脚を上げるたびに男達は淫らな叫びを上げ、尻や胸が揺れることに下品な笑いが溢れ出た。

女達はあまりの光景に怯え、次第に角に集まって固まり、抱き合いながら震えていた。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
巫女は獣と化した男達の拍手と喝采の中、巫女は一枚つつ服を舞台に降ろし、もはや薄い布だけのほとんど全裸になっていた。そのまま、男達の手拍子に合わせて下品な舞を踊り続けた。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
パパの持ってきた三升の酒は小屋の中で男達に回し飲みされ、最後の一滴が喉に消えた。男達は踊りにだけではなく、相当に酔っていた。

『巫女の最後の布が落ちたとき、男達の興奮は堰を切り、一種の狂騒が起こるだろう……』

素面だったパパはもはや止めようがないと思い、どうやって巫女の娘、ケンちゃんの妹、そして他の女達を逃がしたものと、そればかり考えていた。

……タンタタン、タンタタン、タン！

丈鼓の音が止むと同時に最後の布が落ちた。

野獣の歓声が上がった。

けれど舞台に巫女はいなかった。

そこにまっすぐ立っていたのはケンちゃんの妹だった。

夜のシジマだけを纏い、ほの白く蠟燭の炎に浮かんでいた。

蠟燭の芯の焦げる音が聞こえた。

ケンちゃんの妹は巫女の所作そのままに静かに舞い、巫女の所作そのままに飛び上がり、所作そのままに両足で菜切り包丁を踏みつけた。

もう一度飛び、また包丁を踏みつけた。

そのまま舞台の真ん中に倒れた。

白い小股に寄り沿うように、音もなくスウツと血の池が広がった。

……タタタタン、タタタタン……

蠟燭が揺れ、生け贄の白い裸体に捧げるかのような丈鼓の音が、再び始まった。

極彩色の巫女は丈鼓を打ちながらたましい笑い声を上げた。

『ひやくさいさん』と僕は蔵で呟き、なぜ、あの十だった春にパパの詩を読んだことを忘れていたのだろうと思った。それはきつと、パパの詩が詩と言うにはあまりにも生々し過ぎて本当の僕の体験として記憶されてしまい、そしてあまりに生々しすぎてすぐに忘れ去られてしまったからだろう。

僕は蔵の中で立ち上がり、あの雑誌を探そうと思った。消えかけた蛍光灯の光の下、『よくないモノ』たちを蹴り飛ばしながら奥に進むといちばん奥の棚に「蔵書」と書かれた段ボール箱が幾十も積みまれてあった。

僕はその段ボールの数よりも、その棚に巣くう『よくないモノ』の姿に辟易した。

陽が当たれば、あるいは涼しい風が当たれば消えて無くなるくせに、この蔵のいちばん奥にいるときはこんなデカイ態度で、禍々しい極彩色のツラで僕を威嚇している。でも僕はもう十ではなく、こんなモノを恐れるような歳ではない。

「ああ、五月蠅い、どけ」

僕は声に出して言い、最初の段ボールに手をつけた。『よくないモノ』は総出で僕の腕に絡んできた。シャボン玉の表面のような極

彩色に輝きつつ胎児の笑みを浮かべた柔らかなそれは僕の指先から肘や腕に絡みつき、ウネウネと、ズルズルと、まるで川の流れのように、汚物の流れのように蠢きつつ、僕の腕を段ボールから引き離そうとした。

……よいのか、開けて良いのか……

『よくないモノ』は口々に僕を罵った。

「五月蠅い」

僕は段ボールを手を取った。

……これは違うぞ、ここには何も無いぞ、やめるんだ……

蔵の全てから集まったと思われる『よくないモノ』たちは床に満ち、そして伸び上がってきて段ボールの上に重なり合い、必死の形相で僕の腕に這い上がってきた。それは人でも獣でもなく、手も足もなく、目もなく鼻もなく、口さえなくせに、毛虫のようでもあり、ゲジゲジのようでもあり、蛇のようでもあり、さらには『よくないモノ』にはそれぞれ表情があつて、一匹づつその凶暴な顔を僕の顔に突きつけるや、僕の鼻を、耳を、唇を一口づつかじっては自らの仲間に満ちた床にボドリと落ちるのだった。もちろん痛くも何んともない。ただそのしつこさにウンザリした。

「いつまでやってるんだ！」

僕は段ボールを放り出し、『よくないモノ』たちを払いのけた。

段ボールは床に落ちて崩れ、中から父の雑誌が滑り出てきた。『よくないモノ』はその上に重なり重なり、自らは下には何も隠せない透明な身体にくせに、次から次へと重なりつつ、その禍々しい牙を剥いて僕を威嚇した。

「ああ」

僕は気づいた。これだったんだ。パパが踏みつぶしていたのは。この蔵に住みついた、いや、前の屋敷にいて、そしてここに家移りしてきたこの『よくないモノ』たち、これをパパは踏みつぶしていたんだ。

僕は『よくないモノ』を足にしいてパパがしたようにプチッと潰

そうとした。けれどそれは足の下でグニヤリと横に広がりそうそう潰れそうではなかった。足の下で『よくないモノ』たちが嘲笑しているのが感じられ、僕は片足に渾身の力を込めた。

『よくないモノ』はそれでも潰れず、そしてフツと床が抜けたようになつて僕は身体のバランスを崩し、『よくないモノ』の中に落ちて行つた。僕は『よくないモノ』の中に落ちつつ深い深い薄明かりの中で表と裏とが裏返り、腸が皮膚になり皮膚が腸になり、尻が口になり口が尻になり、今が想い出になり想い出が今になり、十の僕の中に閉じこめられた。(つづく)

6 再会、ノラとパパ

5

放り投げたのだったけれど、その書かれてある中身はもう頭の中に入っていた。なぜならパパは僕だったし、僕はパパだったから。

「だったら私に良い考えがある」

パパが（そして僕が）そう言った日から十日ほど経った夕方、『ひやくさいさん』の杜に部落の若者、男女十数人が集まった。そして口々に、招んでもらいたい魂があると叫び、巫女に小屋から出てくるよう懇請した。

「何事です」

出てきたのは娘だった。灯に照らされてやや黄色みがかつてみえる朝鮮服をまとっていた。その表情は神のように硬く、その目で一度射られれば石化してもはや二度と動けないかと思われた。

「何事です」

娘は繰り返した。

「招んで貰いてえ人がおるとです」

先頭に立っていたケンちゃんが言った。声が震えていた。

「こいつと」

ケンちゃんは妹を押し出した。

「結婚するはずじゃった男です。去年肺病で亡くなったはずが、おとついから、こいつの枕元に現れち、なーんも言わんで立つちよるとです」

「見たのは？」

「こいつだけです」

「本当ですか？」

娘はケンちゃんの妹に聞いた。

ケンちゃんの妹は黙って頷いた。娘の威厳ある声に怯えているようだった。

娘は巫女の小屋の中に消えた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

ケンちゃんの妹は怯えた声でケンちゃんに助けを求めた。ケンちゃんもまた怯えた視線を泳がせながら、若者らのいちばん後ろにいるパパの指示を無言で請うた。パパもまた黙ったまま頷いた。

娘が出てきた。

「招んでほしい者の名前をここに書きなさい」

ケンちゃんの妹は兄の目線を恐れた様子で、その紙に、

『西山啓治』

巫女の娘はそう書かれた紙を持って小屋に消えた。

「お兄ちゃん」

ケンちゃんの妹は極度の恐れに震えながら、ケンちゃんの顔を見上げた。ケンちゃんの顔は蒼白となり、そこには一滴の血も通っていないようにさえ思えた。

どれほどの時間が経ったのか、黄昏は夕闇になり、灯りを手にする者の辺りから外には漆のような闇が口を開けていた。魔境はすぐそこにあつた。十数人の若者は次第に寄り合い、輪になって、互いの息を貪るように感じていた。生き物の気配を感じていなければ、ぐにでもその魔界に引きずり込まれるような気がした。

……チャーン……

小屋の中で奇妙な力ネが打ち鳴らされ、静寂が破られた。

若者達は人間の輪を一瞬、締めた。

……チャーン・チャチャーン、チャーン・チャチャーン……

小屋の戸がいきなり開き、灯りと力ネを持った娘を従えつつ極彩色の巫女が歩み出てきた。そのまま若者達には目もくれず、まるで目が見えるかのような歩みで『ひやくさいさん』の社の方へ歩み、小屋と社のほぼ中間地点で立ち止まると、

「招んでほしいのは、お前力ア！」

杖の先をケンちゃんの妹の目の前に突きつけた。目が見えぬとは

思えぬ正確さだった。

ケンちゃんの妹は恐怖のあまり凍りついたのか、何も言えず、額きも出来なかった。

「お前カア！」

ケンちゃんの妹はその場にヘナヘナと崩れ落ちた。

「お前カア！」

巫女の娘がケンちゃんの妹を後ろから抱き、抱き起こした。

「あなたなんでしょう？」

神そのもののような巫女の声に怯え切ったのか、ケンちゃんの妹は娘の声にさえ返事できなかった。

「そうです、こいつです」

ケンちゃんが代わって答えた。

「じゃあ、あなただけ、こちらへ」

……ギヤーツ、イヤダー……

人のもとも思えぬ声を出して妹は立ち上がり、その場を見当違いの方向へ歩み始めた。その歩みを抱きとめたのもケンちゃんではなく、パパでさえなく、巫女の娘だった。巫女の娘は優しい人間の声で、

「大丈夫ですよ。すぐに終わります」

もはや抵抗する気力もなくなったように見える妹を従え、巫女と娘は小屋に入っていた。そして小屋の戸に娘の手がかかったとき、パパは言った。

「私たちも、西山啓治に会いたい」

巫女の娘のしっかりした目が帰ってきた。

「よろしいでしょう。みなさん、お入りなさい」

小屋の中は結構広くガランとしており、むしろ道場と言うにふさわしかった。戸の向かいの壁には北斗七星がかかり、龍の絵があり、山の神らしい女の絵があつて、床には、そこで舞を舞うらしい二畳ほどの舞台と、大きな菜切り包丁を刃を上にして二本平行に板に取り付けた、奇妙な道具が置かれてあった。

全ては四本の蠟燭だけで照らされていた。

「ヨバイタイモノノオ……」

舞台の上に立った巫女が裏返った声で叫ぶと、巫女の娘は舞台下のわきで丈鼓を叩きながら、また同じように裏返った声で、

「イエエエイー……」

「セエメエワア、イカニイ……」

「イエエエイー……」

「イカニイ……」

「ニシヤマケイジラゴハムニダア……」

もはや何語とも知れぬやりとりが巫女とその娘の間で交わされ、丈鼓に合わせた舞踊が始まった。朝鮮服の長い袖がゆったりと円を描き、襦袢の裾が風を起こせば、舞台の蠟燭の炎は前後左右に揺れ、娘の影も気ぜわしく揺れた。丈鼓の音のみが響く小屋の中、絶え間なく揺れる影と共にただ巫女の舞が続いた。

そのまま時だけが過ぎていくのではないかと思われた一瞬、巫女は二本の菜切り包丁の刃に飛び乗った。もちろん裸足だった。

若者達は皆、もちろんパパも、薄暗がりと言って良い小屋の中で息を呑んだ。

娘は丈鼓を叩きながら、

「ヌグセヨオ……」

巫女は、

「モダラヨオ……」

娘に答えながら巫女はいきなり菜切り包丁の上で跳ね、さらにまたもう一度刃の上に飛び乗った。

「ヌグセヨオ……」

「モダラヨオ……」

「ヌグセヨオ……」

「モダラヨオ……」

……

丈鼓の音に乗って際限なく繰り返される刃の上の跳躍に緊張の糸が切れ、ケンちゃんの妹は震えながら気を失ってしまった。

「ソンハミオットツケセヨォ……」

「ニシヤマア、ケイジイ」

ようやくその名を口にすると巫女は菜切り包丁から飛び降り、片膝を立てて舞台の上に座った。そして顔を伏せ、ゆっくりと頭を上げた。

揺れる影の中に娘の丈鼓の音が続き、巫女の盲いた目にはこの時確かな光が宿っていた。初めて見る巫女のその表情にパパもまた霊界の谷を覗き見たような恐怖を憶えた。

「西山啓治さまが降りられました」

そう、巫女の娘は丈鼓を打ちながら言った。

「西山啓治さまに聞きたいことがあったのでしよう」

けれどケンちゃんの妹は何も聞ける状態ではなかった。

「誕生日はいつでしょう」

パパは後ろから聞いた。

「年 月 日」

巫女はパパの誕生日を間違はなく答えた。

若者達の緊張が弛んだ。

「あなたは死んだんですね」

「……」

「あなたは去年、死んだのですね」

「死んだのではない、ここにいる」

「でも、一度、亡くなったのでしよう」

「……」

「ご命日は？」

「年 月 日」

パパが若者らに知らせてあった架空の命日だった。

「どちらで亡くなられたのですか」

「この村でえ、両親と弟たちに見守られえ……」

そのあまりの芝居に若者達の間から一瞬、失笑が漏れそうになった。この瞬間、巫女の化けの皮は剥がれた。

「死ぬときはお苦しみでしたか」

パパはその失笑を隠すように、質問を畳みかけた。

巫女はゆつくりと立ち上がり、西山啓治、つまりパパの断末魔を、それもパパが若者らに知らせてあつた通りに、寸分違わず、丈鼓に合わせて語り、演じ始めた。袖が風を切り、襦袢が舞い、優雅でもの悲しい所作だっただけに、それはもう、荘厳な衣装をまとった喜劇でしかなかった。丈鼓の音も、心なしか張りが失せていた。

「この子とのなれそめをお聞かせ下さい」

これもまた、皆には知らせてあるパパの創作を、巫女は実に立派に演じた。所々に混ぜてある下品なクスグリの箇所ではあからさまな失笑さえ起こったが、それも巫女は自分の語りと舞いで引き出した反応だと思いこんでいるのだろう、所作には次第に熱が入り、狭い舞台をはみ出さんばかりの舞踊になった。

「申し訳御座いませんが、もう一度、この子とのなれそめをお聞かせ下さい」

そうパパが言うと、驚いたことに、巫女はもう一度最初から、それも今度は最初から熱を入れて再現した。今度は若者達から手拍子さえ打たれ、所作は大ぶりになり、小屋は正に喜劇小屋と化した。

「もう一度、もう一度、今度はホントオーの所をおしえちくれない本当は、こん子とあんたはシタっちゃろう、腰が抜くるくらい、シタっちゃろう……」

パパではない誰かが聞いた。

ヒューと口笛が起きた。

巫女は所作の度に含んでいた酒がもう完全に回っていたのだろう、いきなり帽をとって髪を下ろし、けたたましく笑いながら激しく舞い始めた。その所作は下品きわまりないので、巫女の娘は丈鼓を打ちながら顔を伏せた。

男達は拍手と喝采で答えた。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
娘の打つ丈鼓の拍子が軽快なものに替わった。その拍子に乗りながら、巫女は極彩色の朝鮮服を一枚脱いだ。

男達は野獣そのもののような雄叫びをあげ、舞台のすぐそばにまでにじり寄った。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
巫女が脚を上げるたびに男達は淫らな叫びを上げ、尻や胸が揺れるごとに下品な笑いが溢れ出た。

女達はあまりの光景に怯え、次第に角に集まって固まり、抱き合いながら震えていた。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
巫女は獣と化した男達の拍手と喝采の中、巫女は一枚つつ服を舞台に降ろし、もはや薄い布だけのほとんど全裸になっていた。そのまま、男達の手拍子に合わせて下品な舞を踊り続けた。

……タンタタン、タンタタン、タンタラタタン、タンタラタタン……
パパの持ってきた三升の酒は小屋の中で男達に回し飲みされ、最後の一滴が喉に消えた。男達は踊りにだけではなく、相当に酔っていた。

『巫女の最後の布が落ちたとき、男達の興奮は堰を切り、一種の狂騒が起こるだろう……』

素面だったパパはもはや止めようがないと思い、どうやって巫女の娘、ケンちゃんの妹、そして他の女達を逃がしたものと、そればかり考えていた。

……タンタタン、タンタタン、タン！

丈鼓の音が止むと同時に最後の布が落ちた。

野獣の歓声が上がった。

けれど舞台に巫女はいなかった。

そこにまっすぐ立っていたのはケンちゃんの妹だった。

夜のシジマだけを纏い、ほの白く蠟燭の炎に浮かんでいた。

蠟燭の芯の焦げる音が聞こえた。

ケンちゃんの妹は巫女の所作そのままに静かに舞い、巫女の所作そのままに飛び上がり、所作そのままに両足で菜切り包丁を踏みつけた。

もう一度飛び、また包丁を踏みつけた。

そのまま舞台の真ん中に倒れた。

白い小股に寄り沿うように、音もなくスウツと血の池が広がった。

……タタタタン、タタタタン……

蠟燭が揺れ、生け贄の白い裸体に捧げるかのような丈鼓の音が、再び始まった。

極彩色の巫女は丈鼓を打ちながらたましい笑い声を上げた。

『ひやくさいさん』と僕は蔵で呟き、なぜ、あの十だった春にパパの詩を読んだことを忘れていたのだろうと思った。それはきつと、パパの詩が詩と言うにはあまりにも生々し過ぎて本当の僕の体験として記憶されてしまい、そしてあまりに生々しすぎてすぐに忘れ去られてしまったからだろう。

僕は蔵の中で立ち上がり、あの雑誌を探そうと思った。消えかけた蛍光灯の光の下、『よくないモノ』たちを蹴り飛ばしながら奥に進むといちばん奥の棚に「蔵書」と書かれた段ボール箱が幾十も積みまれてあった。

僕はその段ボールの数よりも、その棚に巣くう『よくないモノ』の姿に辟易した。

陽が当たれば、あるいは涼しい風が当たれば消えて無くなるくせに、この蔵のいちばん奥にいるときはこんなデカイ態度で、禍々しい極彩色のツラで僕を威嚇している。でも僕はもう十ではなく、こんなモノを恐れるような歳ではない。

「ああ、五月蠅い、どけ」

僕は声に出して言い、最初の段ボールに手をつけた。『よくないモノ』は総出で僕の腕に絡んできた。シャボン玉の表面のような極

彩色に輝きつつ胎児の笑みを浮かべた柔らかなそれは僕の指先から肘や腕に絡みつき、ウネウネと、ズルズルと、まるで川の流れのように、汚物の流れのように蠢きつつ、僕の腕を段ボールから引き離そうとした。

……よいのか、開けて良いのか……

『よくないモノ』は口々に僕を罵った。

「五月蠅い」

僕は段ボールを手を取った。

……これは違うぞ、ここには何も無いぞ、やめるんだ……

蔵の全てから集まったと思われる『よくないモノ』たちは床に満ち、そして伸び上がってきて段ボールの上に重なり合い、必死の形相で僕の腕に這い上がってきた。それは人でも獣でもなく、手も足もなく、目もなく鼻もなく、口さえなくせに、毛虫のようでもあり、ゲジゲジのようでもあり、蛇のようでもあり、さらには『よくないモノ』にはそれぞれ表情があつて、一匹づつその凶暴な顔を僕の顔に突きつけるや、僕の鼻を、耳を、唇を一口づつかじっては自らの仲間に満ちた床にボドリと落ちるのだった。もちろん痛くも何んともない。ただそのしつこさにウンザリした。

「いつまでやってるんだ！」

僕は段ボールを放り出し、『よくないモノ』たちを払いのけた。

段ボールは床に落ちて崩れ、中から父の雑誌が滑り出てきた。『よくないモノ』はその上に重なり重なり、自らは下には何も隠せない透明な身体にくせに、次から次へと重なりつつ、その禍々しい牙を剥いて僕を威嚇した。

「ああ」

僕は気づいた。これだったんだ。パパが踏みつぶしていたのは。この蔵に住みついた、いや、前の屋敷にいて、そしてここに家移りしてきたこの『よくないモノ』たち、これをパパは踏みつぶしていたんだ。

僕は『よくないモノ』を足にしいてパパがしたようにプチッと潰

そうとした。けれどそれは足の下でグニヤリと横に広がりそうそう潰れそうではなかった。足の下で『よくないモノ』たちが嘲笑しているのが感じられ、僕は片足に渾身の力を込めた。

『よくないモノ』はそれでも潰れず、そしてフツと床が抜けたようになつて僕は身体のバランスを崩し、『よくないモノ』の中に落ちて行つた。僕は『よくないモノ』の中に落ちつつ深い深い薄明かりの中で表と裏とが裏返り、腸が皮膚になり皮膚が腸になり、尻が口になり口が尻になり、今が想い出になり想い出が今になり、十の僕の中に閉じこめられた。(つづく)

「よいモノ」の滝

7

……パパ……

……パパ……

誰かが僕を呼んでいた。

薄目を開ければ、蔵の中に妻と芳ちゃんが立っていた。

「こんなところで寝てちゃ、風邪ひくわよ」

僕は蔵の中の脚立に座り、そのまま寝込んでしまっていたのだった。

「どうしてお前……」

「一人で行くって言って、それで車を置いてっちゃってるでしょう。きつとバスで行って、こっちじゃ芳夫さんに案内させてるんだろうつて思うじゃない。芳夫さんだって忙しいんだから、あなたもいつまでも本家の総領気取りで使い走りさせちゃだめでしょう」

「いえ、奥さん、そんな」

「いいのよ、芳夫さん、いつまでもこの人の本家分家ごっこに付き合わなくても」

「ああ、ごめん、今何時？」

「ちょうど十二時です」

芳ちゃんは妻の向こうから申し訳なさそうに言った。

「パパの詩を読んでたら、いつの間にか寝てた」

「面白かった？」

「わからん。うとうとしながら読んでたから、どこまでが夢で、どこからが想い出で、どこまでが詩だったのか、ゴチャゴチャで、何かなにやら、よくわからん」

「でも、顔はスッキリしてる」

「うん。夢の中でパパに会ったんだ。それでスッキリした」

「そりゃ良かった。じゃあ、行くわよ。車に子供たち待たしてるか

ら」

「子供ら連れてきたのか！」

「ドライブに行くって約束して、雨も止んで晴れてるんだから仕方ないじゃない。家にいてもうるさいだけだし。ダムサイトのレストランに連れて行くわよ。今度は運転お願い」

ノロノロと立ち上がると、僕の膝からパパの雑誌がバサリと落ちた。

「それ？」

妻は言った。

「うん」

雑誌を拾いあげ、ページをめくると、そこからは『よいモノ』たちがサラサラと溢れてきた。

「ああ、ステキね」

「僕のパパはね、君の言うように本当の詩人だったよ。ほら、この詩の中に確かに生きてる」

妻は雑誌のページから滝のようになって滑り落ちる『よいモノ』に見入りながら、

「ステキ……お義父さんに一度会ってみたかったナア」

芳ちゃんは妻の後ろから、

「『ひやくさいさん』には行かれますか？」

「何、それ？」

僕は少し得意な気分で、

「神社みたいなもの。そうだね、こっちの車で子供らを『ひやくさいさん』に連れて行って、そのままダムサイトのレストランに行くよ」

芳ちゃんはまた申し訳なさそうに、

「じゃあ、アタシはもう……」

「御免なさい、今日は主人が引き回しちゃって。どうぞ、もう行っちゃって下さい」

「うん、芳ちゃん、行ってよ。ここの鍵は僕も持ってるから」

「じゃあ」

芳ちゃんはそのまま車に走って戻った。

僕はパパの雑誌から落ちる『よいモノ』の滝にいつまでも見入っていた。

「パパ、ママ、何やってんだよ！」

上の子が待ちかねて蔵に入ってきた。

僕は雑誌を閉じ、蔵の棚に戻した。

8

僕が十だった年、春は呆気なく終わった。

一月ほど村で過ごした朝、ママがやって来て、何事もなかったかのようにそれから僕らは一週間ほど屋敷で暮らした。

そして三人で町に戻った。

学校は相変わらずつまらなかったけど、たえられない程ひどい場所じゃなくなっていた。

その六年後、パパが亡くなる少し前、屋敷はダムに沈んだ。

今でも湧水の年には、干上がった底に屋敷の跡が見える。(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407d/>

ひゃくさいさん

2010年10月8日13時23分発行